

## 翻 訳

# ヨーロッパ諸国のハロウィン (3)

ゴットフリート・コルフ (編)

河 野 真 (訳)

### [解題]

ハロウィンをめぐってドイツ民俗学会の機関誌の2001年後期号に特集された諸論考・報告を訳出紹介しており、その三回目である。因みに第一回では企画者であるゴットフリート・コルフによる指針的な論考と、アイルランドとフランスからの寄稿を載せた。第二回は、イタリア、スペイン、ノルウェーからの報告であった。そして今回は、スウェーデン、オランダ、オーストリアからの研究報告で、執筆者とタイトルは次の通りである。

アグネータ・リーリャ (ウプサラ) スウェーデンのハロウィン — 文化的脅威、それとも歓迎される秋祭り?

Agneta Lilja (Uppsala), *Halloween in Schweden – Kulturelle Bedrohung oder willkommene Herbstfeier?*

ヨーン・ヘルスロート (アムステルダム) オランダのハロウィン

John Helsloot (Amsterdam), *Halloween in Holland*

ベルンハルト・チョーフエン (ウィーン) オーストリアのハロウィン — ドッキングへの行事、グローバルな知識がローカルな形態をつくるのであろうか

Bernhard Tschofen (Wien), *Halloween in Österreich – Ein Brauch zum Andocken oder: globales Wissen schafft lokale Formen*

訳出に当たっては、先回と同じく多少の工夫を施した。原文はスタイルが統一されていず、特に資料やニュース・ソースの提示が本文組み込みと脚注の場合があって区々であるが、いずれも脚注に組み替えた。同時に、日本文と欧語とが過度に入り混じることによって読み辛くなるのを避けるために、必要な欧語も脚注にまとめた箇所がある。また日本では馴染みの薄い事項については訳注をほどこし、それらはそれぞれの報告の末尾に配置した。

## スウェーデンのハロウィン — 文化的脅威、それとも歓迎される秋祭り？

アグネータ・リーリャ (ウプサラ/スウェーデン)

(原タイトル) Agneta Lilja (Uppsala), *Halloween in Schweden – Kulturelle Bedrohung oder willkommene Herbstfeier?*

### はじめに

1998年10月30日を前にした深夜、ゲーテボルクのディスコで火事が起き、63人の若者が死亡し、約200人が負傷した。その火災は、スウェーデンで最大規模の惨事であり、この上なく痛ましい出来事であった。亡くなったのは全員が20歳以下の少年少女で、一番若い男の子はちょうど12歳だった。実は、私は10月30日は、朝食タイムに合わせた番組のためにテレビに出演することになっていた。ところが、真夜中にテレビ局から電話があり、仕事が必要でなくなったとの断わりと共に、ゲーテボルクの惨事がハロウィンと関係していることを伝えてきた。ディスコ火災の直後にテレビでハロウィンの祭り行事を論じるのは、不謹慎と判断されたのである。

スウェーデン中を茫然自失させたこの大火災の前から、すでにハロウィンはこの国では論議が交わされ、それをめぐって賛否が渦巻く現象だった。私が1997年に行なった調査では、多くの人々、とりわけ大人たちはこの催しに否定的であることが明らかになっていた<sup>1</sup>。もっとも、その理由はさまざまだった。ある人は、非常に古くからの行事で、欠かすべからざるものである万聖節とそれと一体のランタンを掲げた墓参りがないがしろにされかねない、と言うのだった<sup>2</sup>。また別の答えは、ハロウィンは<非スウェーデン的>であり、他の<スウェーデンの>祭りと較べて<そぐわない>と言うのであった。それ以外にも、この行事は、専らコマースリズムに冒されており、ビジネスと売り手の側からの営利騒ぎとされた。もちろん、<死>のテーマの当てこすりという内容がいかかわしいと見る故

---

<sup>1</sup> これは、調査研究「ハート型の砂糖菓子とケーキを欲しがる化け物たち — ヴァレンタイン・デーとハロウィン：スウェーデンにおける2つの新しい祭り行事」(Gezuckerte Herzen und süßigkeiten-süchtige Gespenster. Valentinstag und Halloween—zwei neue Festbräuche in Schweden. 1998)にまとめている。

<sup>2</sup> もっとも、墓参りにランタンを携えるのは、スウェーデンでは比較的新しい風習であり、それにも拘わらず、こうした見解が行なわれているのである。墓参りに際するランタンの風習については次を参照、Rehnberg 1965.

の反撥もあった<sup>3</sup>。ゲーテボルクのディスコでの大惨事の直後にハロウィンを論議することをテレビ局が忌避したのは、マスメディアで散々騒がれていた、かかる否定的な諸々の見解があったことから理解できよう。

火災そのものは、ディスコへ入るのを拒否された3人の少年が火をつけたことによると判明したが、それは、ハロウィンを敵視する人々の利用するところとなり、その直後から猛烈な抗議の声が挙がった。ハロウィンがなければ、惨事は起きなかったであろうといった見方もなされた。ある大手の地方紙には読者の声として、ゲーテボルクの大火災では仮面の飾り付けが部屋の壁から燃えながら落ちたことを指摘する、ある女性の意見を掲載した。それは、ハロウィンそのものに加えて＜可燃性の材料でできた仮面＞が如何に危険であるかは明らかだ、と言うのである。女性は続けて、＜仮面のために四方を見わたすことができず、視界が奪われ＞、火事に気づくのが遅れた、とも指摘した<sup>4</sup>。もっとも、彼女の奇妙なものの見方もまた無傷ではいられず、逆に、ハロウィンと大惨事を結びつけることには懐疑的な読者も少なくなかった<sup>5</sup>。

## 背景

スウェーデンでのハロウィン行事の歴史には、やや独特なものがある。この行事をスウェーデンに導入した名誉は自分にあるとする特定の人物がいるからである。娯楽用品・アクセサリ販売会社「バタリックス」(Butterick's & LECO AB)の支配人、ベンクト・オーランダー氏(Bengt Olander)である。彼はアメリカ人女性と結婚して、すでに1980年代にハロウィン関連用品の販売を始めた。もっとも、販売はしたものの、顧客の範囲は、スウェーデン在住のアメリカ人のグループをほとんど出ることにはなかった<sup>6</sup>。しかし、オーランダー氏は、1991年にストックホルムのハードロック・カフェ<sup>i</sup>と共にハロウィン週間を企画するに及んで成功を取めた。1990年代半ば以来、氏は、ハロウィン週間には安定した売れ行きを上昇を記録することができた。すでにその当時、売上高はクリスマス期間を超えていたのである<sup>7</sup>。しかし彼は、決して意識的にキャンペーンに走ったのではなく、顧客の受容を満たすことにつとめただけである、と強調している。同時に、彼は、バタリックスは影響力を及ぼすようなチャンスを多くもっているわけではなく、また成功と言って

<sup>3</sup> Lilja 1998, p.86.

<sup>4</sup> UNT 4.XI. 1998.

<sup>5</sup> UNT 10.XI. 1998

<sup>6</sup> AB 1.XI. 2000.

<sup>7</sup> Lilja 1998, p.62 and 69.

も、例えばエリクソン<sup>ii</sup>やヴォルヴォ<sup>iii</sup>とは比べ物にならない、とも言う。彼は、自分のとつた戦略を次のように要約した。

バッテリーへ来る客のなかには、多くのユダヤ教徒の方々もおられ、仮庵祭<sup>iv</sup>の飾り付けがもとめられます。私どもは、それをアレンジして差し上げるわけです。しかし、… スウェーデンの全国民をモザイクじみた信仰に導くことなど、考えたことはありません<sup>8</sup>。

オーランダー氏は1990年代にハロウィン・グッズの販売を進めていたが、その時は、社会的にはハロウィン行事はほとんど目立たなかった。スウェーデンに住んでいるアメリカ人が中心であり、狭いグループが幾つかあるだけだった。例えば、ストックホルムのメルビスコーラの生徒たちで、その学校では1985年以来ハロウィンが祝われてきた<sup>9</sup>。他に、娯楽用品・若者のファッション用品を専門に扱う商店などが、早くから蜘蛛や妖怪や魔女といったハロウィン・グッズをそろえていた。またレストランのなかにも、店内を吸血鬼<sup>ファムバイア</sup>や魔女で飾るところがあり、フラワー・ショップもデコレーション用のカボチャを置いたりしていた。しかし総じて、孤立した現象に過ぎず、一般にはほとんど知られていず、注目されもしなかった<sup>10</sup>。

ハロウィンがコマースリズムとメディアに本格的に登場したのは1997年であった。その年に、ハロウィンに関連したコマースが目に付くようになり、雑誌でも映画でもテレビでも取り上げられた。食品業界の家庭向けコマースや、玩具販売に因んだ宣伝でもハロウィンの日に合わせた企画が現れた。ハンバーガー・チェーンのマクドナルドは、魔物やトロール<sup>v</sup>をあしらったハッピー・ミール (Happy Meal) を売り出し、商店街は子供向けにメーキャップ・サービスと魔物の饗宴なるものを企画した<sup>11</sup>。1998年のハロウィンを控えた時期には、コマースは大規模になり、やがて食品や花卉からエレクトロニクス関連や繊維にいたるあらゆる業界が新たな行事に目を向けた。街角のレストランはいずれも、特別メニューのハロウィン・パーティや魔物の饗宴を企画した<sup>12</sup>。

やがてハロウィンはマーケットに常に顔を現し、とりわけ1999年には家具や化粧品や

<sup>8</sup> ベンクト・オーランダー氏から筆者への手紙, 06.XI. 2000.

<sup>9</sup> Mörbyskola [Skola=School] は学校名; NA 3.XI. 1995.

<sup>10</sup> Lilja 1998, p.64 and 72.

<sup>11</sup> Lilja 1998, S.73f.

<sup>12</sup> Mersmak 9, Metro 30.X. UNT 23.X. 1998.

自動車販売など種々の業界の参画を見て飛躍的に増加した<sup>13</sup>。この年には、大手の百貨店「オーレンス」(Ahléns)は、ハロウィンの一月前から関連商品であふれていた。また祭り行事が、はじめて万聖節に移動した。つまり、10月31日の日曜から、次の週末にずらされた。それは、公的な決定などではなく、レストランなどの提唱によるもので、ハロウィンの祭り行事は、万聖節の週末(11月5日から7日)に催された<sup>14</sup>。メニューにも、悪魔の角、トランシルヴァニア風牝牛のヒレ肉<sup>15</sup>、蜘蛛の巣状のヴァニラ・アイスが登場した<sup>14</sup>。ハロウィンの祭りがずらされた最大の理由は、万聖節の週末が学校の休暇とされることによるものと見て間違いなからう。

2000年には、ハロウィンの祭りの広告はさらに大々的になった。コスチューム、カボチャのデコレーション、その他アクセサリなどのハロウィン・グッズは大幅に増加した。とりわけ、カボチャをベースにした特別料理のレシピは新聞にも食品店にあらわれる度合いが急速に増えた。百貨店による子供向けに企画も多くなった。子供たちに、メーキャップや仮装やそのコンクールに参加させるのである<sup>15</sup>。各地で、仮装した少年少女の姿が普通に街頭でみられることになり、〈町じゅうに妖怪と骸骨〉が現れた、とも言われたものである<sup>16</sup>。かくして、ハロウィンは、もはや一般には見えないものではなく、逆に誰もがその存在を知らないではいられないものに変った。筆者が、ハロウィン行事がスウェーデン社会に定着したのを2000年と見るところから始めたのは、かかる推移を踏まえている。

## コマーシャルイズムとアメリカナイズのスペクタクル?

プレゼントが求められたり期待されたりする他の祭り行事と同じく、ハロウィンにもコマーシャルイズムが強くなり重なっている。ナプキン、蠟燭、コスチューム広告のステッカーなどから食用のカボチャに至るまで、商店は、祭りに合わせて膨大な関連グッズを提供する<sup>17</sup>。当然ながら、娯楽用品やコスチュームの販売に関係する業界が特に活発である<sup>18</sup>。年中行事となっている他の祭りと同様、商店は、数週間前から、関連商品を市場に出す。それらが目に付くように工夫されることによって、消費者は、ハロウィンと特定のシンボ

<sup>13</sup> DN 5.XI., UNT 26.X., Metro 28.X. 1999.

<sup>14</sup> UNT 5.XI., Ergo XII. 1999.

<sup>15</sup> Konsum medlemsblad 43, Metro 27.X., Söderhamnsnytt 30.X. 2000.

<sup>16</sup> DN 3.XI. 2000.

<sup>17</sup> COOP Forum 43/2000.

<sup>18</sup> BR Leksaker, Barnens Hus Okt. 2000.

ルや色彩の結合に〈馴らされる〉。すなわち、魔女、妖怪、パンプキン、骸骨などであり、また黒とオレンジが特別の色彩になる。眼鏡から服飾にいたる諸々の業界は、日刊紙に広告を出して、ハロウインの日取りに注意を喚起する。もつとも、それらの商品と、そもそも祭りがもっている意味とのあいだには、論理的な関係はほとんどみとめられない。眼鏡販売のチェーン「シンサム」(Synsam)は、ハロウインには眼鏡の値段を30%割引、家具雑貨ブティック「リラ・シュトフブティケン」(Lilla Soffbutiken)は、三人掛けソファを9000スウェーデン・クローネで提供するが、モード・ブティックは通常の品揃えのブラウスやセーターを広告に出している<sup>19</sup>。もつとも、今のところ、そうした商品提供が消費の向上につながっているかどうかは断言できない。しかし、そうした情報から推測されるように、ハロウインをめぐる潜在的な受容の喚起をうながしていることは確かである。

コマーシャルの観点から特に興味深いのは、食品のキャンペーンである。特別価格をも手段として用いつつ、その種のキャンペーンは、祭りのメニューに人々を誘う。例えば、蜘蛛を模したフリカデル、緑色のジャガイモ粥、妖怪オレンジといったものである<sup>20</sup>。同時に、フィレ肉やハムや鶏肉や鮭なども、ハロウインと結び付けられ、妖怪やカボチャのマークを付けて売られるのである<sup>21</sup>。しかし、カボチャに匹敵するような確立された〈ハロウイン食品〉は存在しない。しかし、おそらく祭りを意識的に販売に活用したことによって、ある種の食品が、値段が下がったことも相俟って魅力を増して、祭りと組になっていった面はあるであろう。今日では、さしずめオレンジがそうであるが、それには彩りにおいてカボチャと重なることが与っていよう。特定の食べものが、他の多くの食品よりも祭りにマッチすることを消費者が覚えこむまでの過程を追うのは、なかなか興味深いことである。コマーシャルは、新たな伝統を創出する上で大きな力をもっている。その宣伝の対象となる食品は値段も抑えられているだけでなく、手軽に作れるものであることが多く、そのため年間の他の行事でも受け入れられる可能性をもっている。祭りが浸透する基準とは、畢竟、人々の間に容易に伝えられることであり、例えば、新しい物の考え方もとめられるのではなく既存の祭り伝統と衝突するのでもないメニューなら、そうした側面を満たすことになる<sup>22</sup>。スウェーデン人がハロウインに特別の料理を食べることに慣れるなら、カボチャのデコレーションやパンプキンや妖怪の蠟燭をもとめる割合も高まる可能性があるであろう。

---

<sup>19</sup> Metro 25.X., SvD 4.XI., UNT 27.X. 2000.

<sup>20</sup> Konsum 43/2000.

<sup>21</sup> Kvantum 44/2000.

<sup>22</sup> Elfving 1981, p. 121 ff.

### ヨーロッパ諸国のハロウィン (3)

ハロウィンに対するスウェーデンでの批判の大部分は、コマーシャルイズムの側面に関してである。事実、行事は、屢、ショッピング騒ぎ、あるいは商品を売る側の祭りの観を呈する<sup>23</sup>。もとより、その原因は、それを狙って毎度大量の商品が投入されることにある。ハロウィンが多数のスウェーデン人が自分の側から祝うようなことがない限り、大多数の者は、人目を惹きはするものの不必要でもある品物が大量に店頭に並ぶのを見つづけるだろう。同時に、それは、スウェーデンが、一般にアメリカナイズとして意識されるものに冒されことでもある。批判者の多くの目に映るところでは、スウェーデン人は、資本主義や大量生産や低級な趣味といった＜アメリカ的＞なものを安易かつ無批判に受け入れている。ハロウィンは、そうした一面的なアメリカの文化の流入ではなく、むしろグローバルな大衆文化と見るべきであるにも拘わらず、スウェーデンがアメリカのミニアチュアへの道を走っていると見る向きも多いのである<sup>24</sup>。

ヴェルメラントのゼフレでの若者たちの間の1998年アンケートが示しているのは、彼らが＜アメリカナイズ＞には対して懐疑をもっていたことである。ハロウィンについて、彼らは、＜根っからアメリカ的な伝統＞であり、＜帝国主義＞であり、＜多重資本主義＞とし、その行事は行き過ぎであり、止めてもかまわないと考えていた<sup>25</sup>。しかし同時に、彼らは、1997年に私自身が聴き取り調査を行なった多くの人たちと同じく、アムビヴァレントな反応もみせた。すなわち、アメリカ的なものや外来のものへの反撥がある一方、仮装の祭りがスウェーデンの陰気な秋の季節には歓迎すべき変化でもあるとの見方をも示したのだった。例えば、＜陰気になり勝ちなスウェーデン人が羽目をはずして祝い騒ぐ機会をもつ＞のも悪くはなく、＜一年に一度くらい暴れるのは実に楽しい＞と見ているのである<sup>26</sup>。さらに彼らは、ハロウィンは、むしろコスチュームの祭りとして活用したい、とも語った。したがって、若者たちは、＜アメリカナイズ＞という一般の議論に影響されてはいるが、同時に彼らは、ハロウィンをことさら外来のものとは考えていず、むしろ日頃接触しているグローバルな若者文化の一環とみなしている。それゆえ、彼らはこの祭りをたやすく受け入れるのであり、事実、今日ではハロウィンをスウェーデンでも積極的に活用しようとする幾つかのグループもみとめられる。

---

<sup>23</sup> Lilja 1998, p.64ff., GP 9.XI., UNT 24.X. 2000.

<sup>24</sup> Pells 1997; Lilja 1998, p.79ff.

<sup>25</sup> IFGH 7337, 7338, 7351, 7357.

<sup>26</sup> IFGH 7336, 7345, 7345; Lilja 1998, p.76f.

## 万聖節への脅威となるハロウィン

ハロウィンへの強い批判は、そのコマースリズムやアメリカナイズされることにあるのではない。慣わしとなっている万聖節への脅威であり、また死のテーマをあつかう手法が感心しないという点に、より多く反撥が向いている<sup>27</sup>。因みに、新しい行事の受容においては、それによって取って代わられる既存の行事よりも優れたものとして位置づけられるという現象がよくみられる。同時に新しい行事は、それに相応しい新しい意味を作り出し、また社会の秩序との折り合うべきものとされる<sup>28</sup>。しかしハロウィンの場合はそれにはあてはまらない。逆に、大人たちは、この行事が墓地に灯りをともす点において万聖節と競合することに穏やかではいられない<sup>29</sup>。そうした憂慮は1990年代半ばから見られはしたが、危惧が高まったのは、ハロウィンが販売業者によって万聖節に移動させられた1999年からであった。特に、ハロウィンの愛好者たちが仮装して墓地に入り込み、万聖節を執り行っている人々が不安を感じる事態には、批判の声が高まった<sup>30</sup>。

そうした危惧は2000年にも高まりを見せた。そのきっかけになったのは、教会がハロウィン行事についてメディアを通じて拒否の見解を示し、さらに抗議のための松明行列を企画するなどの敵視の姿勢をとったことであった。教会は、ハロウィンをめぐる一連の動きを、異教や悪魔主義やオカルトや死霊信奉の擡頭であるとして非難した<sup>31</sup>。のみならず、ある宣教牧師は、ハロウィンの祭りを、社会のなかの暴力に関連付けた。

ハロウィンの祭りは、妖怪や魔女や骸骨や斧や流血であふれ… いずれも悪と暴力と死のシンボルである。暴力が学校でも広く社会でも非難されていることに照らすなら、これほどの二重基準はあるまい<sup>32</sup>。

モラル面でのパニックが発生したと言えるかも知れない。メディアを通じて、ハロウィン攻撃に向けてヒステリックな気分が煽られることになった。その要点は、キリスト教の万聖節が脅かされていることであり、その文化的価値への危機意識であった。かくして社会問題が作り上げられ、ハロウィンの祭りに突進する若者たちのグループが非難的に

27 Lilja 1998, p.74ff.

28 Elfving 1981, p.121 ff.

29 Lilja 1998, p.79f.

30 SvD 7.XI., GP 9.XI. 999.

31 BT 30/9, GP 5.X. 2000.

32 Expressen 30.X. 2000.



なった<sup>33</sup>。大人たちは、キリスト教の行事とモラル価値を護らねばならないとし、しかもそれを無防備な小児たちの名前の下に主張したのだった<sup>34</sup>。新聞は読者の手紙や議論であふれるほどだったが、そこでは、妖怪や魔女の仮装、また死者や死霊の祭りが無邪気な子供たちを墮落させ、悪魔主義者にしてしまいかねないとの親たちの心配が山盛りであった。親たちのなかには、さらに進んで、ハロウィンを控えて大鎌<sup>ゼンゼ</sup><sup>viii</sup>やその他のく恐ろしい玩具>を販売することを以って、玩具メーカーを<子供たちへの心理的攻撃>の故に非難する人もいた<sup>35</sup>。かくして、ハロウィンの危険性をめぐって、スウェーデンのテレビ番組でも、小さな子供を抱えた親たちの議論の様子が放映されたのだった。

しかし、子供たちは、親たちの心配をよそに、別の受けとめ方をしているようである。子供たちは、妖怪や大鎌、その他のハロウィンに付き物の小道具を少しも怖がってはず、祭りを楽しんでいる。そして祭りに欠かせないものでもある扮装による物集めに夢中になる傾向を見せている。すなわち、“trick or treat” (もてなしておくれ、さもなきやあ、やっつけるぞ)あるいはスウェーデン語での言い方では“bus och godis”である<sup>36</sup>。子供たちが妖怪や骸骨の格好をして近所に迷惑をかけたり、うろつき回って乞食ざたの振舞いをし、拳句は、お菓子を呉れない人には卵を投げつけたりするのを、嘆かわしいと感じ、また怒りも感じている親たちがいる<sup>37</sup>。「ゲーテボルク方言・地名・フォークロア・アーカイヴ」(DAG/Göteborg)の経年調査によれば、仮面を着けた物乞い行事は増える傾向を見せ、今日では、ハロウィンの祭りの決まった一部とみなされている<sup>38</sup>。とまれ、子供や若者の間では、ハロウィンの祭りは浸透しているのである。

## 伝統をめぐる闘い

私の見るところでは、ハロウィンに対する大規模な反対プロパガンダにも拘わらず、この祭りは今日ではスウェーデンに定着している。それを催す人々は、ハロウィンを、最も暗く陰鬱な時節の歓迎すべき変化とみなし、祝い行事と仮装に興じる公認の機会ととらえている<sup>39</sup>。それに、批判者が言い張るほどには、万聖節の蠟燭行事を脅かしてもいない。

<sup>33</sup> Cohen 1987, p.9, 16 and 31 ff.

<sup>34</sup> GP 26/9, SN Okt. 2000.

<sup>35</sup> AB 27.X. 2000.

<sup>36</sup> Lilja 1998, p.69ff., SvD 31.X., 3.XI. 1999, UNT 25.X., GP 31.X. 2000, IFGH 7338, 7344, 7345, 7346, Expressen 4.XI. 1999.

<sup>37</sup> UNT 29.X. 1998, GP 1.XII. 1999.

<sup>38</sup> Fredrik Skott 氏から口頭で教示を受けた：23.IV. 2001.

<sup>39</sup> Lilja 1998, p.74ff., IFGH 7345, 7339, 7340.

むしろ、二つの行事は両立の様子を見せている。

ハロウィンは毎年ちょうど万聖節に行なわれる。そのとき、〈老人たち〉は教会堂へ詣で、死者を偲んで蠟燭をともし、他方、〈若者たち〉は多彩なお化けの仮装に興じる。かくして、私たちは、それぞれの祭りで、満ち足りるのである<sup>40</sup>。

要するに、誰もが、墓参をするわけではない。言い換えれば、墓地での灯火の行事に積極的にかかわるのは、一部の人々である。子供、若者、非キリスト者といった大きな集団は、その外部にとどまる。それゆえ、ハロウィンは、死と死霊という同じテーマにかかわる祭りを豊かにすると言ってもよいくらいである<sup>41</sup>。また同じ人間が万聖節をもハロウィンを祝うことに誰も反対しはしない。それは、同じ人が墓前に灯火を点けずれば、コスチュームの祭りに参加することについても同様であろう。

しかし、万聖節とハロウィンが実際に共存するなら、どうしてモラル面からの憤慨や危惧、あるいは伝統をめぐる闘いが起きるのであろうか。その答えは、すべての人間にとって中心的であるテーマそのものにもとめられよう。すなわち、死、および死との付き合い方である。キリスト教の万聖節と墓前での灯火は、むしろ現代にかなっていよう。現代社会では、死は日常生活から追い払われ、病院と墓地に押し込められている。言うまでもなく、これらは、日常生活から分離された場所である。墓前で蠟燭を灯し、死者を偲ぶのは、こうした関係を象徴的な表れである。死は否定され、日常生活に浸透するのを阻まれている。

それに対して、同じく死への関係であっても、ハロウィンがシンボリックに表現するのは、まったく異なる。それはポスト・モダンな視点である。そこでは死をめぐる、大鎌や妖怪や棺柩といったシンボルの活用が積極的かつ開け広げに議論される。死は日常と経験のなかに現存することが許され、万聖節の表出としての静寂や畏敬に満たされたものではなくなっている。おそらく、死は、むしろ存在における様態の一つあるいは経過とされ、究極の結末と見られるのではない、と言ってもよいであろう。したがって、ハロウィンにおける死に対するかかる姿勢は、私たち誰もが関係する他ない何物かを非ドラマ化する可能性として機能しているところがある。

伝統をめぐる闘いは、常に、中心的なテーマと、このテーマが形作られるべき（形作られることができる）諸々の観点の周りを廻っている。ハロウィン週間は、死霊と逝去を、

---

<sup>40</sup> IFGH 7343.

<sup>41</sup> Lilja 1998, p.85.

社会的に確立された見方と衝突するような仕方でもテーマにする。同時に、新しい行事は、日常を再び魔性化しようとする希求の表れであると共に、統一的なものとしてのキリスト教会が魂におよぼす力を喪失した現代、ニューエイジ運動によって始められた今日のプライヴェートな宗教性を希求する表れでもある<sup>42</sup>。

(スウェーデン語からドイツ語への翻訳：Kerstin Risse)

**参考文献：**

- Bauman, Zygmunt 1994, *Döden och odödligheten i det moderna samhället*. Göteborg.  
Cohen, Stanley 1987, *Folk Devils & Moral Panics. The Creation of Mods and Rockers*. Oxford.  
Elfbing, Mary-Ann 1981, *Varför studera innovativa idéer? Valentindagen och Halloween, 1*.  
Nordlund, Ivar (red.) 1981, *Fynd och forskning. Till Ragna Ahlbäck 17. VII. 1981*. (Meddelanden från Folkkultursarkivet 7.) Helsingfors.  
Hammer, Olav 1998, *På spaning efter helheten. New Age en ny folketro?* Stockholm.  
IFGH 7337-7357, 1998, Haushalterreklame.  
Lilja, Agneta 1998, *Sockrade hjärtan och godissugna spöken. Alla Hjärtans Dag och Halloween – två nya festseder i Sverige*. Uppsala.  
O'Dell, Tom 1997, *Culture Unbound. Americanization and Everyday Life in Sweden*. Lund.  
Pells, Richard 1997, *Not Like Us. How European Have Loved, Hated, and Transformed American Culture Since World War II*. New York.  
Rehnberg, Mats 1965, *Ljusen på gravarna och andra ljusseder. Nya traditioner under 1900-talet*. (Nordiska museets handlingar 61.) Stockholm.

新聞名と略記号

- AB = Aftonbladet.  
BT = Borås Tidningar.  
DAG = Dialekt-, ortnamns – och folkminnesarkivet: Göteborg.  
DN = Dagens Nyheter.  
GP = Göteborgsposten.  
NA = Nerikes Allehanda.  
SN = Södermanlands Nyheter.  
SvD = Svenska Dagbladet.  
UNT = Upsala Nya tidning.

---

<sup>42</sup> Hammer 1998; Lilja 1998, p.48ff.

[訳注]

- i (p.143) **ハードロック・カフェ** (Hardrock Café) : アメリカの家庭料理とロック音楽を組み合わせたレストランの国際的なチェーン。1971年に2人のアメリカ人アイザック・ティグレット (Isaac Tirgett) とピーター・モートン (Peter Morton) がロンドンのハイドパーク近くに一号店を開いた。今日では世界中に100近い店舗が有し、日本でも8店舗が営業している。すでにロンドンの一号店にロールスロイスのクラシック・カーが展示されたように、ロックを始めとして広くアメリカ文化の紹介を意識的に行なっている。
- ii (p.144) **エリクソン** (Ericsson) : 1876年にエラーシュ・マグヌス・エリクソン (Larsh Magnus Ericsson 1956-1926) がストックホルムで起こした電話機修理会社から始まり、電話機メーカーを経て、今日では世界有数の通信・通信機器会社として知られる。
- iii (p.144) **ヴォルヴォ** (Volvo) : スウェーデンの世界的な自動車メーカーとして知られ、特にバスやトラックに強みを発揮している。1926年創業、本社所在地はゲーテボルク。
- iv (p.144) **仮庵祭** (Sukkoth, 独 Laubhüttenfest) : 「幕屋祭」とも訳され、伝承ではモーセに率いられた出エジプトの際の幕屋設営に因むとされる。10月に当たることが多く、葡萄の収穫などを祝う祭りでもある。過ぎ越しの祭り (キリスト教では復活祭となった)、五旬祭 (刈り取りの祭り/キリスト教では聖霊降臨節となった) と共にユダヤ教の三大祭の一つ。
- v (p.144) **トロル** (Troll [pl]-en) : 北欧神話の巨人あるいは矮人の妖怪
- vi (p.145) **万聖節の週末** (11月5日から7日) : 万聖節は本来11月1日であるが、スウェーデンでは、現代社会の労働のリズムに合わせて週末に移っているようである。なお1999年は10月31日が日曜であった。
- vii (p.145) **トランシルヴァニア** (Transylvania) : 現在のルーマニアの北西部で、吸血鬼 (Vampir) 伝説の発祥地とされることで一般的に知られ、ここでもそれを踏まえている。
- viii (p.149) **大鎌** (Sense) : 本来、穀穂や牧草を刈り取る鎌で、人の背丈ほどある。同時に、死神の決まった持ち物として描かれてきた。麦の穂や牧草を薙ぎ切るように人間の生命を断ってゆくというイメージである。

## オランダのハロウィン

ヨーン・ヘルスロート (アムステルダム)

(原タイトル) John Helsloot (Amsterdam), *Halloween in Holland*

10年も遡れば、ハロウィンという言葉を目にしたことのある人はめったにいなかったと言っても、あながち間違っただけではない。それに対して、今日はどうかであろうか。フランドル地方の海岸に近い辺鄙なイーゼンディーケ村 (Ijzendijke) でのことだが、何と一人の児童が説明をきかせてくれるまでになっている。つまり、ハロウィンはアメリカの祭りであり、10月31日の夜、子供たちが恐ろしい姿の仮装をし、大声で“trick or treat” (〈お菓子を頂戴、さもなきややつつけるぞ〉の意) と唱えつつ家々を訪れる、というのである。しかしそれだけに、その子が、自分たちはそんなことはしない、と言うのは印象的だった<sup>1</sup>。では、オランダでは、ハロウィンはどのような催しになるのだろうか。その祭りには、ポジティブな意味がこめられるのか、それともネガティブなものと考えられているのか。また、どのような広まり方をしているのだろうか。

オランダのハロウィンでは、今ふれたようなアメリカ風の仕方は全くおこなわれないか、ほとんど知られていない。僅かに1999年にアムステルダムの街角に魔女が一人ぼつんと現れた程度である<sup>2</sup>。もっとも、もう少し言い添えるなら、アメリカ人学校のあるデン・ハーグ近郊ワッセナール (Wassenaar) では、アメリカ人の子供たちのお祭りにオランダ人の子供や家族も参加した。しかし、女性教員のアン・ドッズはこう言い切った。〈数年も経たないうちに、あなたたちも、同じお祭りをするようになりますよ。仮装をしてお菓子を食べるのは、誰にだってきっと楽しいはずよ。〉<sup>3</sup> 同じような事例は他にももっとあるかも知れない。しかし、ハロウィンに関する限り、子供たちの世界は驚くほどひっそりしたままである。

学校が決定的な役割を果たしていることは疑えない。ニコラウス<sup>i</sup>、クリスマス、カーニヴァル、イースター (復活祭) などの祭りが、手芸品、歌唱、パン焼き・菓子作り、その他の晴れの食べものに彩られた年中行事では重要な位置を占める。と共に、これらの祭りの拠点は両親の家でもある。たしかに、ハロウィンは、これまでのところ、それらに匹敵するほどの位置を得ていない。しかし、託児学園<sup>ii</sup>ではハロウィンに出遭うことになる。例

<sup>1</sup> Provinciale Zeeuwse Courant 25.X. 1999.

<sup>2</sup> Het Parool 5.XI. 1999, Liesbeth Wytzes.

<sup>3</sup> Algemeen Dagblad 28.X. 2000, Marjolein Straatman.

えば、ハルダーウィーク (Harderwijk) では、子供たちが〈世界の祭り〉のテーマの下にハロウィンの仮面を手作りし、またエンスケーデ (Enschede) ではカボチャに切り込みを入れて中を刮りぬく<sup>4</sup>。因みに託児学園では、通常の学校よりも、創造性の点では多様な刺激がはたらいている。

一見したところ、ハロウィンに対して学校が控えめであることには、却って驚かされる。もっとも、学校でも、低学年の生徒たちは、魔女を手作りでこしらえたり、お絵かきで描いたり、あるいはハリー・ポッターの本の読んでもらったりする。これらの活動も、〈ハロウィン〉のテーマにまで引き上げるなら、付加価値を得るかも知れない。しかし、そうなれば、子供には相応しくないと教師がみなすような残酷なものが大手を振ることになりかねない。さらに重要なこととして、学校のカレンダーでは、11月は昔から決まった祭りが場所を占めてきた。聖マルティン祭<sup>iii</sup>である。オランダの各地で、子供たちは学校で、11月11日の夜の行列のために紙のランタンを拵える。その祭りに際して、一般に人々は、殊のほか〈物ねだりの喜び〉(heischeftig) を味わう。そうした行事行為の意味内容を多くの人々は知らないでいるが、〈冥土の灯火〉、〈隣人愛〉、そして特に重要なものとして〈土着の伝統〉といった言葉が言い回しきながら口にされる。ハロウィンとの違いは、外面的には小さく、また恐ろしい仮装の有るか無いかといった程度である。因みに、ハロウィンは、新聞や雑誌では屢々〈マルティン祭〉のアメリカ版とも称される。しかし、両者の些細な違いは、重要でなくもない。以下で取り上げるように、土着的というレッテルは、ハロウィンの受容における大きな障害になっている。学校は、それを基準にしているように見えるほどである。それに加えて、行事における望まざる(すなわち外国から得た)二重化にもぶつかることになる。因みに、〈ダブル・フォークロア〉(folkloreverdubbeling) とは、あるジャーナリストが付けた言い方である<sup>5</sup>。その指標になるべきこととしては、ブランバント地方の数十の学校に、カボチャの種が無料で提供され、秋にそれを展示することが期待されたが、結局、ほとんどの学校は応じなかった<sup>6</sup>。

周知のように、仮装した児童による物ねだりは、アメリカ合衆国では、ハロウィンの多様な形態の一つに過ぎない。大人たちは、祭りをパーティーの形で催し、また特にニューヨークではパレードの形をとる。さらに5年ほど前から、オランダの大手の新聞がその種の記事を載せるようになった。特派員の報告や<sup>7</sup>、写真の転載などである。例えば、アール・ゴア副大統領が<sup>ヴェアヅオルフ</sup>狼人間に扮し、<sup>ミイラ</sup>ゴア夫人は木乃伊の仮装でハロウィン・パーティーに現

4 De Twentsche Courant Tubantia 1.XI. 2000.

5 Karl Knip, NRC Handelsblad 14.XI. 1998.

6 Elsevier 28.X. 2000, Eric Vrijssen.

7 例えば, S. Montag in NRC Handelsblad 1.XI. 1997, 4.XI. 2000.

れたことなどである<sup>8</sup>。あるいはセンセーショナルな報道が広まることもある。その種の見出しの事例を挙げれば、「ルインスキー・スタイルはハロウィンの人気者」<sup>9</sup> や、「ハロウィン・パーティーで男性俳優殺害」<sup>10</sup> などがある<sup>v</sup>。その他、アイルランド人社会でのハロウィン祭りの報道があつて、毎年オランダのアイリッシュ・クラブで行事が行なわれている催し物の記事が組まれる<sup>11</sup>。あるいはまたオランダ在住のアメリカ人たちがセーヴォルデン (Coevorden) のコミュニティ・センターや<sup>12</sup>、幽霊屋敷に改造されたアムステルダムのバーに集合することなどの報道である。そこへ足を踏み入れた女性ジャーナリストは、こんな挨拶で迎えられた。〈ようこそ、私が連続殺人犯です〉。これに対して彼女はこんなコメントは加えている。〈冷静なオランダ人としては、このアメリカの伝統的な仮装舞踏会なるものには病的なところがあると考えざるを得ない〉<sup>13</sup>。

ハロウィンのパレードは、オランダでは見ることができない。もつとも、ニューヨークの女性作家タマ・ヤノウィッチ<sup>v</sup>によれば、アムステルダムで女王誕生日<sup>vi</sup>に開催される大きな仮装行事はアメリカの行事に大層似ているとされる<sup>14</sup>。それだけに、1980年代終わりから90年代初め以来、ハロウィン・パーティーが盛況を呈している。アムステルダムのディスコ<iT>が1989年に企画したのは、その最初のものの一つであつた。そして毎年、そのディスコは、蜘蛛の巣や墓石や十字架などのインテリアで飾られる。入場者にも仮装がもとめられるが、特に、どこの誰とも分からないことが歓迎される。しかもコンテストで賞品を得るチャンスがあり、それ自体は祭りの伝統的な要素でもあるが、それが参加者を刺激してもいる。注目すべきこととして、そこでのハロウィン・パーティーが1998年は11月14日に、1999年は11月6日に、つまり土曜に開催された。したがって、パーティーは、ハロウィンのイヴェントというより、テーマ・イヴェントの夕べ (thema-avond) の性格を帯びた。1995年からナイカケルヴェン (Nijkerkerveen) という小村でハロウィン・パーティーを企画してきたデイヴ・クラマーは、こう言っている。〈私は毎月祭りを企画しており、それには毎回テーマが必要です。そこでハロウィンに注目したのです〉。ディスコ“iT”での催しの場合も、それを企画してきたエドヴァイン・ヴァン・コレンブルク氏によれば、オランダの人たちに合った形態で進められたのだった。〈祭りは、冷静な私た

<sup>8</sup> Trouw 29.X. 1997, 3.XI. 1998.

<sup>9</sup> De Telegraaf 9.X. 1998.

<sup>10</sup> Agemeen Dagblad 30.X. 2000.

<sup>11</sup> 次の報道を参照, Trouw 31.X. 2000, Bas den Hond.

<sup>12</sup> Nieuwsblad van het Noorden 1.XI. 1997.

<sup>13</sup> Het Parool 4.XI. 2000, Corrie Verkerk.

<sup>14</sup> Het Parool 1.V. 2000.

ちオランダ人には合っていない。その点で、ハロウィンは、その滑稽なことで、ともかく楽しいものをまとめるチャンスなのだ。> クラマー氏の同僚もそれを裏付けてくれたが、同時に、彼らのパーティーがたちまち人気をあげたことに驚いている。<皆な、仮装、つまり自分を誰であるかを分からなくするのは実に面白いと言っていますよ>。因みに、アムステルダムのソーホー地区 (Soho) などでの“Dress to scare if you dare”のスローガンはよく知られている。ユトレヒト (Utrecht) やアイントホーヴェン (Eindhoven) などの大都市でも、またテルノイツェン (Terneuzen) やウィートゲースト (Uitgeest) といった小さな町でも、共にそうした催しや儀式が行なわれる場所はディスコである<sup>15</sup>。例えば、1998年には、アマースフォールト (Amersfoort)、アムステルダム (Amsterdam)、ベルゲン・オブ・ゾーム (Bergen op Zoom)、ブレーダ (Breda)、デルフト (Delft)、ミデーブルク (Mideelburg) など各地で、ゲイのディスコがハロウィン・パーティーとハロウィンお化け会を開いたが<sup>16</sup>、それらも同種の光景の一つという性格にあった。言い換えれば、決してゲイが中心になっているのでも、それが特に刷新的というわけでもなかった。もつとも、同種のを遡ると、ホモセクシュアル・クラブ (COC) のマーストリヒト支部によるウーマン・ワークの館では、かなり早い時期からハロウィン・パーティーが催され、そこでは魔女の仮装がなされ、またその後には魔女迫害が演じられてきたことが明らかになっている<sup>17</sup>。

ディスコと同じく、遅くとも1990年代半ばからは、各地のスナックも、ハロウィンが客寄せの手段になることを発見していた。今日、スナックの内部は、ぞっとするような“spooky”な工夫(お化け屋敷であることが多い)がほどこされて、魔女やドラキュラや妖怪の仮装が効果を発揮している。例えば、ツァーンダムの交差点に位置するロックとブルースのスナックでは、「女吸血鬼の夜」(Ladies Vampire Night)が催された<sup>18</sup>。極端なものへの志向がよく現れたのものとしては、マルク・ドウトルー<sup>vii</sup>が姿をみせたレフヴァアルデン (Leeuwarden) の事例があり<sup>19</sup>、また市長の禁止措置で果たせなかったとは言え、「酒漬け人間」(menselijke delen op sterk water)の触れ込みでアルコール漬けの人体をスナックのデコレーションに使おうとしたシント・ヤンステンのラザルス (フランドル沿岸地区: Lazarus, Sint-Jansteen, Seeländisch-Flandern) の事例<sup>20</sup>からもうかがえる。またブラバ

15 Algemeen Dagblad 29.X. 1998, Robert Haagsma.

16 De Gay Krant 23.X. 1998.

17 De Limburger 1.XI. 1991.

18 De Zaankanter 25.X. 2000.

19 Leeuwarder Courant 2.XI. 1996.

20 Algemeen Dagblad 28.X. 1999; de Volkskrant 30.X. 1999, Eva Nyst.



ント地方では、プリンゼンベーク (Prinsenbeek) のスナック「楽市集団」(Marktzicht) において、ハロウィン・パーティーは同地で盛んなファスナハトと容易に接合した。それに参加した者たちの大部分は、通常のカーニヴァル・シーズン以外でも外に出て騒いだりするグループのメンバーであった。〈こうしたパーティーは実に楽しい〉とペーターは語ったが (彼は28歳で既に年配者の一人である)、〈なぜなら誰もが扮装をして一緒に行動するのだから〉と言う<sup>21</sup>。逆に、ハロウィンがカーニヴァルの行列のグループや山車のテーマとなることも、これまた避けられなかった<sup>22</sup>。

ハロウィンのテーマは、他の諸々の団体によっても同様に取り上げられている。レストランもそうである。例えば、アムステルダムの「ル・ガラージュ」(Le Garage)<sup>23</sup>; アッセン (Assen) とドラハテン (Drachten) のアメリカン遊戯レストラン「ヤンキー・ドゥードゥル」<sup>viii</sup> がそうである<sup>24</sup>。またコミュニティ・ハウスの場合もある。一例を挙げれば、ヴォルムスヴェールでは12歳から16歳までの若者が対象であった<sup>25</sup>。また若者の団体による場合もあり、例えば、ヴェスターボルク (Westerbork) では、同地の難民施設の住人が祭りに招待された。さらに公式性の薄い組織のこともあり、例えばアムステルダムのスカート・ゲームの愛好家団体は、金曜に開催するスカート・ゲーム・パーティーを「恐怖の夜、スカート・ゲーム大会」(Fright Night Skate) と名称を改めた<sup>26</sup>。もちろんスポーツ団体が担うこともある。一例としてヴォルマー (Wormer) のスヌーカー協会「リヴァーサイド」(Riverside) は、一年前にはカーニヴァルに際してコスチュームをそろえて武芸試合をみせたが、ハロウィンには“Halloween shoot out”を企画した<sup>27</sup>。上級学校や専門学校も例外ではなく、例えば1995年にはデールネ (Deurne) の専門カレッジ<sup>x</sup>が、また1999年には、ドールン (Doorn) の繊維専門学校<sup>x</sup>がそうであった<sup>28</sup>。かくして、ハロウィンの祭りのほとんどは、商業的で開放された酒場・スナック、あるいは特定の団体の閉鎖的な同種の店とむすびついたものとなっている。しかし、極くわずかながら、小村ヒポリトウスヘーフが秋の大市を既に1988年に「ハロウィン・マーケット」の名称に変更したような事例もある。〈この大市は、夏と秋の沈滞期を橋渡しすることを目的としている〉、と主催者の

21 BN/DeStem 25.XII [=X?]. 2000, Bas Kock.

22 Tubbergen, Losser, De Twentsche Courant Tubantia 6.III. 2000; Clinge, BN/DeStem 26.II. 2001.

23 Het Parool 1.XI. 1999.

24 Midweek 25.X. 2000.

25 De Zaankanter 22.XI. 1995.

26 Trouw 21.X. 2000, Het Parool 28.X. 2000, de Volkskant 28.X. 2000.

27 Onze Krant Zaanstreek 21.X. 1993.

28 de Volkskrant 30.X. 1999, Eva Nyst.

ニーク・リーツェルマンは語っている。確かに、その時期には催し物があまりみられないため、一般の人々の関心は高まる一方である。そこでは、100を超える屋台の経営者がコスチュームを着けて店に立ち、また変装した子供たちのために妖怪の行列が村を練り歩く<sup>29</sup>。同じく、アムステルダム近郊のランツメール (Landsmeer) でも、中心地のショッピング・エリアでは、二体のパンプキンのぬいぐるみがおどけた仕草で歩きながら、ハロウィンの特別売り出しを宣伝し、また子供たちのためにはお化けのケーキ作りの実演があり、女性たちに向けては、魔女の箒が用意され、それに乗って写真を撮ることもできる、とされた<sup>30</sup>。もちろん、ハロウィンは10月31日から独立して、それ自体が独自〈テーマ〉として理解されることもある。卒業試験終了祭り<sup>アビトゥア</sup>に企画されることがあるのはその一例であり、事実、ウーデン (Uden) では上級学校が〈ハロウィン彗星〉の飾り付けをし、生徒たちは仮装で練り出して、〈ミスター・ハロウィンとミス・ハロウィン〉を選んだ<sup>31</sup>。あるいは、村の若者組で大晦日にジルヴェスター・パーティーを開くこともある。因みに、それを扱った記事の見出しは「今度はハロウィンがテーマになった」であった<sup>32</sup>。

もちろん、ハロウィンのイヴェントは、アメリカのモデルを伝える新聞記事だけで動かされてきたわけではない。ハロウィンの関する情報は、他のルートによっても媒介されてきた。その際、第一に考えなくてはならないのは、多数のホラー映画である。例えば、この間のハロウィンでは、“H20”, “Scream”, “Scary Movie”, 「十三日の金曜日」(Friday the 13th), 「ナイトメア・ビフォア・クリスマス」(The Nightmare before Christmas) などであり<sup>xii</sup>, これらはいずれも新聞でも詳しく報道され、また映画館あるいは家庭でもビデオで鑑賞することができた。もっとも、イギリスなどとは違い、オランダのテレビ局は、10月31日にホラー映画あるいはハロウィンに因んだドキュメントを特別に放映するに過ぎない (チャンネルは “National Geographic Channel”)。これらの映画に対する一般の反応を確かめるのは難しいが、それが愛好され、ある種の一体化に誘うものとなっていることは否定できない。事実、娯楽産業でも、怖いキャラクターが大はやりである。多数のホラー・ファンにとっては刺激的で、これら問題のあるキャラクターに魅せられている。もちろん、新聞が指摘するように、他の刺激による代替もあり得ないわけではない。そこで挙げられるものには、「マリリン・マンソン」, 「オジー・オズボーン」, 「プロディジー」などの前衛ロック・グループ<sup>xiii</sup>, あるいは「<sup>ダークマン</sup>暗闇男」や「<sup>ブリーチャー</sup>説教師」といったくはちゃ目茶

<sup>29</sup> Noordhollands Weekblad / Zaanstreek 24.X. 1995.

<sup>30</sup> Kompas 26.X. 1998.

<sup>31</sup> Brabants Dagblad 9.V. 1998.

<sup>32</sup> Rucphen, BN / DeStem 2.I. 2001.

な>コミック・キャラクター<sup>xiv</sup>である<sup>33</sup>。これらのサブ・カルチャーは、若者だけでなく子供たちにも歓迎されている。

大評判のハリー・ポッターのシリーズでハロウィンが描かれていることも、示唆するところが大きい。さらに、インターネットも、ハロウィンの祭りについて多くの情報を提供する。新聞にも、空想を掻き立てるサイトへの案内が載っている<sup>34</sup>。実は、このインターネット・サイトこそ、ハロウィンがケルトに起源をもつことを空想豊かに描いた元凶であった。新聞もまた、数年前から、その種の解説をつけるようになった。すなわち、ハロウィンの際の仮装は死霊を追い払うためのものであるとの説明が好んでなされる一方、その<元の意味は背後に退いている>ともされるのである<sup>35</sup>。もつとも、そうした異教に引き寄せた意味付けに対しても、公的な場での反論はきわめて少ない。わずかに、<オランダのキリスト教徒は、ハロウィンには距離をおくことが望ましい、なぜならそれは死霊への信奉を土台にしているからだ>といった投書が見られる程度である<sup>36</sup>。むしろ多いのは、ハロウィンにおける<商業主義的>、<アメリカ的>な顔立ちへの苛立ちである。それは時には、<私たちオランダの独自の文化をまもる>べきであるとの呼びかけと絡んでいる。しかし、並行して、ハロウィンは昨今ではサンタクロースやヴァレンタイン・デーと同じく親しまれたものとなっているとの声も挙がる。それもあながち誇張ではないのである。

**【訳注】** (数点については原文内の注記をこの箇所に移した)

- i (p.153) ニコラウス：小アジアのミーラの司教であったとされ、11世紀にイタリアに遺骨が請来されて一般化した。例祭日は12月6日で、その日を節目にした雑多な習俗がヒントになって1930年代に現代のサンタクロース像がコココーラ社などによって考案された。
- ii (p.153) 託児学園 (buitenschoolse opvang)：学校が終ってから親の仕事が終るまで児童の面倒をみる営利施設 (原文のかっこ書きの説明をここに移した)。
- iii (p.154) 聖マルティン祭 (Sankt Martin)：4世紀のトゥール司教マルティヌスの例祭日 (11月11日) で「マルティーニ」(Martini)とも称され、古くから年間の節目となってきた。季節の移り変わりでは冬の始まりとされ、また雇用契約の期限となることもあった。
- iv (p.155) ルインスキー・スタイル：Monica Lewinsky (born in 1973 加州Beverly Hills出身) は、

<sup>33</sup> Algemeen Dagblad 31.X. 2000.

<sup>34</sup> 例えば、Noordhollands Dagblatt 28.X. 1999, Utrechts Nieuwsblad 29.X. 1999, Monique Brandt.

<sup>35</sup> De Telegraaf 28.X. 2000.

<sup>36</sup> Trouw 3.XI. 2000.

クリントン米大統領の在任2期目半ば1998年初に発覚し翌年まで一年余にわたって世界的に注目をあつめた同大統領によるスキャンダルに巻き込まれた元ホワイトハウスでの司法実習生。大柄・丸顔・黒髪・大きな眼は写しやすかったのか、1999年春先のケルンのカーニバルでも張子人形が登場した。

- v (p.155) **タマ・ヤノウィッチ** (Tama Janowitz) : 1957年にサンフランシスコに生まれ、現在はニューヨークのブルックリンに在住の作家。早くから文藝・藝術サークルに関係し、アンディ・ウォルホールとも交流があったが、短編集“Slaves of New York” (1986) で名声を得た。続く長編小説“A Cannibal in Manhattan” (1987) も知られる。
- vi (p.155) **女王誕生日** : オランダでは国家元首である女王の誕生日が国の祝日とされる。ただし、現在のベアトリクス女王 (Beatrix) は1月31日生まれて寒冷の季節のため、前ユリアナ女王 (Juliana) の誕生日で気候のよい4月30日が祝日となっている。また日程は調整されることがある (2006年は日曜のため前日の4月29日であった)。当日は、仮装行列やフリーマーケットなど種々のイベントで賑わう。
- vii (p.156) **マルク・デュトルー** (Marc Dutroux) : ベルギーの凶悪犯罪者。1956年ブリュッセルに生まれ、当時同国の植民地であったコンゴで成長し、後、ベルギーへ帰った。1995、1996年に小児を誘拐・虐待・殺害し、また8歳から19歳の少女6人を幽閉して性的に虐待を加え、内4人を殺し、さらに犯罪の仲間をも殺害した。1996年に収監された。警察の捜査が手遅れになり、はじめ対処が甘かったことから、警察と国家の対応への不信の声が高まるなど、90年代後半からベルギーの社会を揺るがす社会問題となった。またマルクの育った家庭事情として、父親がロシア革命のレーニンの崇拝者で家族に絶えず暴力を振るっていたとの脈絡が強調されたり、当人が少年時から闇ポルノ・ビデオの販売、後にその製作を手がけていたことなどが大きく取り上げられたことなどから、報道の視点も問題になった。
- viii (p.157) **アメリカン遊戯レストラン「ヤンキー・ドゥードル」** (American Fun Restaurant „Yankee Doodle“) : 元はアメリカの民謡・愛国歌で、その名称 (原意は間抜けなアメリカ人) をつけたホテルやレストランは全米に多くの種類があり、また第二次世界大戦中に製作された数種類の愛国的な映画も知られる (“Yankee Doodle Dandy” 1942など)。元の民謡はアメリカ独立戦争に因むとされるが、またニューヨーク地方がオランダの植民地であった頃のオランダ人入植者の小麦の刈り取り歌に遡るとの知識も活用されて、ドラーテンなどオランダ諸都市のアメリカン・スタイルのレストランがこの店名を掲げて人気を呼んでおり、約25店舗が営業している。
- ix (p.157) **専門カレッジ** (Peellandcollege) [原文内の注記をここに移した]。
- x (p.157) **ドールンの繊維専門学校** (Hogeschool voor Testiel en Management in Doorn) : [原文内の注記をここに移した]。
- xi (p.158) **卒業試験終了祭り** : アビトゥア (独 Abitur) ないしはバカロレア (仏 Bacarolea) は全国一斉に行なわれる高等学校卒業試験で大学進学可否など学生の大きな節目であり、その終了を祝う祭りは学生生活に定着してきた。学生生活の苦痛と不安の的であった試験を擬人化して死刑を言い渡したり火炙りにするなどの風習もあり、その点ではハロウィンの行事がこの節目に飛び火しても不思議ではない。
- xii (p.158) **H20以下** : いずれもアメリカで製作されたホラー映画やコミック・アニメのタイトル。  
**H20** : “Halloween H20. 20 Years Later” 1998年、スティーヴ・マイナー監督作品 (Steve Miner) ;  
**Scream** : 1996年ウェス・クレイヴン監督作品 (Wes Craven) ;  
**Scary Movie** : 2000年デヴィッド・ザッカー監督作品 (David Zucker), 以後2003年には第3作が封切られた。;  
**Friday the 13th** : 1980年、シー

### ヨーロッパ諸国のハロウィン (3)

ン・カニングム監督作品 (Sean S. Cunningham) ; **The Nightmare before Christmas** : 1993年, 原作・製作ティム・バートン (Tim Burton), 監督ヘンリー・シリック (Henry Selick) によるアニメ映画。年中ハロウィンの架空の町ハロウィン・タウンでカボチャの大王ジャック・スケルトンがクリスマス・タウンを垣間見て, クリスマス作りをはじめることによって異変が起きる。

xiii (p.158) 前衛的なロック・グループ:「マリリン・マンソン」1989年に米フロリダで“Marilyn Manson & the Spooky Kits”として結成された, 1992年からこのバンド名を用いている。ヴォーカリスト, ブライアン・ヒュー・ワーナー (Brian Hugh Warner, born in 1964) の藝名で, 美の象徴マリリン・モンローと悪の象徴チャールズ・マンソンを合わせている。すでに最初のバンド名に“spooky”の語があるが, バンドのメンバーは実際の顔が分からないほど濃いメーキャップが特徴で, ライヴ・パフォーマンスも奇抜である。;「オジー・オズボーン」(Ozzy Osborne) ジョン・マイケル・オズボーン (John Michael Ozbourne, born in 1944) が中心になって4人によるバンド「ブラック・サバス」(Black Sabbath) が1969年に結成され, 1970年代末-80年代にそれぞれがソロ活動に転じた。最初のバンド名が「暗黒の魔物集会」の意味し, またオズボーンのソロ第一作が「ブリザード・オブ・オズ血塗られた英雄伝説」のタイトルを持つなど怪奇性への傾斜が見られる。舞台で生きた鳩を食いちぎり, 観客も猫や鳥の死体を投げるなどのパフォーマンスが繰り広げられたことでも知られる。近年, またオズボーン家の常識はずれの生活が放映されたことにより茶の間の人気も集めている。;「プロディジー」(The Prodigy) イギリスのテクノ・バンドで, エセックスで1990年に“Hardcore Techno”のバンド名で4人で活動を開始した。リアム・ハウレット (Liam Howlett キーボード), キース・フリント (Keith Flint ボーカル/ダンサー), マキシム (Maxim ボーカル), リーロイ・ソーンヒル (Leeroy Thornhill ダンサー) の4人で, 1992年頃からそれぞれのソロ活動の割合が高まった。

xiv (p.158/159) 「ダークマン」, 「プリーチャー」(Preacher):「暗闇男」(Darkman) は1990年製作のアメリカ映画, サム・ライミ監督作品 (Sam Raimi)。遺伝子工学の若き研究者が, 恋人の弁護士が入手した書類のためにマフィアに拷問の末に殺されるが, 残った耳をもとに自ら開発した人工皮膚によって超人となって復讐する。暗闇では活動できるが光があたると一定時間で人工身体が崩壊するという設定。;「説教師」(Preacher) は原作ガス・エニス (Girth Ennis), DCコミックス社の怪奇性の強いレーベル「ヴァーティゴ」(Vertigo) に1995-2000年に連載された。牧師とそのガールフレンド, それにアイルランドから来た吸血鬼シャラディが, 天国を失踪した神を探すストーリー。2000年に映画化された。

## オーストリアのハロウィン — ドッキングへの行事： グローバルな知識がローカルな形態をつくるのであろうか

ベルンハルト・チョーフエン (ウィーン)

(原タイトル) Bernhard Tschofen (Wien), *Halloween in Österreich – Ein Brauch zum Andocken oder: globales Wissen schafft lokale Formen*

「ハロウィンが若者サブカルチャーのジョークの日だとは、誰にも言わせない」。これはウィーンの日刊紙『デイ・プレッセ』の11月1日の見出しである<sup>1</sup>。市民的・保守派の新聞の主幹がこうして文化批判を繰り広げたのは、<オーストリア共和国の(当時は社会民主党であった)> <財務大臣>が、あるハロウィン・パーティのオープン・スピーチで、<ウィーンにおける公的な秘儀者センター>と言い切ったことに注意も向けさせようとしたのである。たしかに、その指摘は事実と触れ合っている。ハロウィンはオーストリアの日常に定着を見た。もっとも、どこでもと言うわけではなく、またその形はメディアを中心につくられているのも事実である。ともあれ、ハロウィンは、その広まりを認識できる文化的テーマとなった。また日常のなかでは何が作動しているか、すなわち異物と自己、生きることと死ぬこと、喜びと不安、自然と文化といった対比を確められることができる文化的なテーマとなっている。

### I.

この「ヨーロッパ諸国へのアンケート」に付した案内の論文のなかで、ゴットフリート・コルフは、主だった動向を観察するのに続いて、幾つかの問いを立てた。それらも現象の全体の一部であるが、また至るところで行なわれている早急な回答を、質問のかたちで是正することをも意図している。なぜなら、その行事は、それに関わる個々人が自ずとポエジーを提示し、またそこに思い思いの文化批判を添えもし、また文化にかかわろうとする(具象の)証左をも残しており、その点は、すでに充分語られており、それに耳を傾ければ、先の一連の問いものも解決済みとなるほどである。

コルフのキイ・ワードに従いつつ二三スポットライトを当ててみるなら、オーストリア

---

<sup>1</sup> Hans Haider, *Primitive Kürbis-Kultur*. In: Die Presse vom 3. Nov. 1999.

の場合は次のようにまとめることができる。問1「新しく、そして複合的？」の見出しの下に、多彩な工夫によって大西洋を隔てて変化した諸機能が取り上げられる。これについては、メディアの報道は、概念と動向の知識では時宜を得た報道をおこなっている<sup>2</sup>。次いで、問2「消費人類学？」に焦点を合わせて幾つかのモチーフが顧みられる。例えば新聞が、＜食料品店でカボチャが品不足になるばかりか首都の農民マーケットですら同じ事態が起きている＞<sup>3</sup>ことに注目したり、あるいはコラムニストが＜オーストリアで我々が鉛筆削りからゴミ・バケツに至るまで、どうしてけばけばしいオレンジ色のカボチャの形を買う必要があるのか＞<sup>4</sup>と懐疑を投げかけている。問3「メディアの行事？」では、＜テレビ批判＞の投書には、類似の姿勢から、ハロウィンは＜メディアの行事＞として片付けられ、その点では、本物ではないことが連想され、また定着における欠陥が問題視される<sup>5</sup>。この文脈によれば、メディアの行事は外部から到来し、それに対して、地元での受容を地域本位としてみとめることは観察の外に置かれている。

その際、問4「パンプキン・カルト」について言えば、やはりその特徴としてハロウィンとの繋がりがなくしては考えられない。逆に、地方的に特色のある野菜料理の旗印としてカボチャがリヴァイヴァルにあることを背景にしたオーストリアの習俗の断片を見出すこともできる<sup>6</sup>。他方、問5「ルーツカルトか？」については、この行事について広く行なわれている意味付けでは、＜ルーツ（根源）＞への問いは、ケルト・アイルランドの断片という大まかな回答のなかで片付けられると共に封じ込められ、また＜ルート（経路）＞の方は現代の研究課題であるにも拘らず、これまで説明されないままである。拡散・受容の過程に目を注ぐなら、換骨奪胎を読み解くよりも、自国のなかの古い起源を指摘する方が容易でもある。＜大昔から＞中を割りぬいたカボチャが行なわれてきており、＜プルッツァー＞(Plutzer) や＜ブルーツァ＞(Bluza) といった呼び方で親しまれていることを挙げるのは難しくない<sup>7</sup>。問6「プレイとしての仕事？」について言えば、こう問うことによつ

<sup>2</sup> 例えば、「万聖節の前夜」のタイトルでオーストリア新聞通信団 (Austria Presse Agentur=APA) が「知識」欄で行なったコメントを参照, “Abend vor Allerheligen” In: Der Standard vom 31. Okt. / 1. Nov. 1998.

<sup>3</sup> Der Standard vom 28. Dez. 2000.

<sup>4</sup> Die Presse vom 21. Dez. 2000.

<sup>5</sup> 例えば、「ハロウィン・ホラー」の見出しによるテレビ批判を参照, “Halloween-Horror”. In: Die Presse vom 2. Nov. 2000.

<sup>6</sup> <それでも私たちは、パンプキン祭りであり、ハロウィンの祭りではない> (コメンテーター: フーベルト・ヴァイチャッハー [Hubert Weitschacher, Regionalmanager des Retzer Landes.]) In: Die Presse vom 27. Okt. 2000.

<sup>7</sup> 例えば次の記事を参照, Andrea Dee, Vom “Plutzer” zum “Pampkin”. In: Der Standard vom 28./29. Okt. 2000.

て、浸透能力をもつハロウィン・フォーマットの生殖細胞としてのであるようなライフ・スタイルの様態への接近が解き放たれることは、ここでの資料によって確かめることができる。しかし、意味付けに長じた都会のエリートが（文化的に感化された近隣世界としての）〈地方〉へ影響を及ぼすことも見逃せない。そうした〈地方〉は同時に、体験が上昇する舞台であり源泉でもある。体験昂揚は、一見すると問7「世俗化と脱神話化？」の標識のもとにある儀礼に、それに照応する田舎風の神話的な燃料を供給する。因みに、行列に加えるに、〈パンプキンが流れゆく光の海〉や〈キャンプファイアを囲む魔女の踊り〉も、ワイン生産地域のパンプキン祭りのレパトリーでもある<sup>8</sup>。

問8「教会の対立者？」は、オーストリアについては、特筆すべきものは見られない。〈すべての習俗の意味が空にされる文化喪失〉<sup>9</sup>が非難され、また地元の伝統に異教の趨勢が積み重なることが批判的に取り上げられたり、あるいは〈いい加減にしてくれ〉といった声が多少聞かれる程度である<sup>10</sup>。因みに、一般的には原理主義的なカトリック教会の立場をとることで知られるザンクト・ペルテルン<sup>i</sup>のクルト・クレン司教は、あるインタヴューのなかで、〈例えばハロウィンやそれに類した馬鹿げた催しものだが、その影響は、パフォーマンスも含めて、一般に考えられているより無害なものだ〉と語った<sup>11</sup>。それゆえ、彼の司教区で二三の神父が、万聖節のミサに学校の生徒たちを参加させるにあたって仮面の扮装のままでよし<sup>12</sup>、さらにプルカウ<sup>ii</sup>では数日続く祭礼のプログラムのなかに日曜の祝日ミサに〈カボチャ・パンの聖別〉が、同じく土曜の午後には〈魔女の踊りと炎の魔術〉が組み込まれたのは、決して偶然ではない<sup>13</sup>。同時に設問に挙げられた問9「代替宗教」については、農村に土着したヴァリエーションに求めるよりは、むしろ、超越的存在とのプレイを掲げたり、また他の諸々の仮面習俗と接続したりもするパーティー・カルチャーにおいて問うのが適していよう。すなわち、若者に限らず大人もまたエロスと死と悪魔の看板の下に集うところのパーティー文化である。〈ハロウィンを成り立たせている

<sup>8</sup> Der Standard vom 19. Sept. 2000.

<sup>9</sup> 参照, Haider (注1)

<sup>10</sup> 次の新聞記事を参照, 「〈グルメ・マーケットのカボチャの売り手は最近ラジオでどれほど満足を語ったか〉 〈クラムプスが死に絶え, ハロウィンが流行る〉, この通りなら, ハロウィンには, つくづくお引取りを願いたい」 Der Standard vom 15. Dez. 2000.

<sup>11</sup> クルト・クレン司教 (Kurt Krenn) の発言については, 「幼子キリストを信じたことことはない」の見出しによる次の新聞記事を参照, “An das Christkind habe ich nie geglaubt”. In: Der Standard vom 15. Dez. 2000.

<sup>12</sup> 1999年にニーダエスタライヒ州南部でこれを聴取した。

<sup>13</sup> 参照, 2000年10月28/29日に行なわれた「レッツ・ラントの第8回パンプキン祭り」のプログラム (Programm des 8. Kürbisfestes im Retzer Land, Pulkau, 28./29. Okt. 2000).



狂乱は、逝去と死者を思い浮かべることへの不安をも糧にしている>との推測は、これまた<新聞>が載せた文化批判の方向の声である<sup>14</sup>。

オーストリアにおいてゴルフの質問状に対して寄せられたポピュラーな回答を簡単に集約するなら、問10「読解の多様性？」が、対象を把握する推進力となっているであろう。その際、材料となる知識は、<匿名の手紙>さながら好きなように使うことができる。インターナショナルなスタンダードをとった情報を『エンサイクロペディア・ブリタニカ』にしたがって核心をもとめるなら、すなわち語源の痕跡、ケルト起源、異教の儀礼、キリスト教会と世俗の両方の活動、移民の習俗、文明化、シンボルとしての<ジャック・オ・ランタン>であるが、それらを探るなら、地域的に根付いてもいれば、形態の変化を閲してもいる。同時に、グローバルな知識は、地域における<sup>・</sup>伝統<sup>・</sup>の<sup>・</sup>創出 (invention of tradition) を助けている面もある。

## II.

以下の論述は、上に挙げた諸点に等分に触れるものではない。最初に引用した指針に従うものの、オーストリアという一区画のデータである。それゆえ、辛うじてヨーロッパの大きな広がりにも組み込まれてはいるが、同時に独自のまとまりにもある、また集約される。ハロウィンは、1980年代半ばまでは、オーストリアではほとんど知られていなかった。祭りの実際も、1990年頃にもなお、ウィーンを拠点とする国際組織やアメリカ文化を追いかける若者文化の分野でみとめられたに過ぎない。その頃はじまった重要な動きとしては、二つの種類が並行していたことを挙げることができる。一つは、<インターナショナル・コミュニティ>の家庭のなかで、ハロウィンが子供の行事として祝われた。もともと、オーストリアのマーケットには、なお関連したデコレーションの材料も、<trick or treat>遊戯のための大量規格品も用意されていないために、即興的なものであった。二つ目は、大学生寮や都心の酒場で、ファンタジーとホラー文化をヴィヴィッドに表現する種類のパーティーが開かれていたことである。この二つの動きは、差異のあり方において理念型的な二種類でもあるが、既に1993年には、そこにもう一つの動きが加わった。これについては後に取り上げるが、ともあれ当初は収穫祭のスタイルで、同じく吸引力を発揮した(また今も発揮している)。それと並行して、デコレーション用品・遊戯用品店と食料品店によって潜在的なマーケットが掘り起こされたが、これ自体は1996年よりも前には遡らない。ともあれ、その辺りを境にして、以後、ハロウィン用品として特殊なものをあつか

---

<sup>14</sup> Haider (注1).

う売り場は急速に面積を広げ、また年を追うごとに新しい商品提供者と商品が飛躍的に増加した。しかし、それはオーストリアだけのことではなく、むしろヨーロッパのマーケット動向にオーストリアも参画したのであった。因みに、2000年の時点を取り上げると、既にそれ以前からニコラウス<sup>iii</sup>や復活祭の兎<sup>iv</sup>を象ったチョコレート製品がよく知られていたが、田舎の食料品店でも、それと同じようなディスプレイを、多少ためらい勝ちではあれ、ともかくも手懸けるようになった。そうしたディスプレイでは菓子類が中心になったが、なかでも特筆すべきはチョコレート製品であった。その点では、既に1999年から、ある大手のチョコレート・メーカーが、四季それぞれに特色のある詰め合わせ商品を売り出していた。かくして、ハロウィンが、復活祭とクリスマスと肩を並べるような状況が始まった<sup>15</sup>。種々の紙製品、紙コップと紙製の皿、紙製ナプキン、提灯、くもてなしてくれ、さもなきやあいたずらするぞ> (trick or treat) でせしめた菓子類を入れる印刷の紙袋、これらは今日では場所をとらないどころではない。絵柄を印刷した小さなステッカーや、パンキン形の反射板やその他怖がらせるような工夫をほどこした装飾の小物類が所狭しと並んでいる。それらのなかには、ドラッグストアや紙製品専門店で売られるものもある。仮面や衣装、特に子供の身体に合わせたものは、専門店や玩具店が扱っている。カンテラ、蠟燭、家庭の生け花にあしらう飾り物は、種々のチェーン店に共通にみられるだけでなく、日曜大工用品店や安売り家具店で、持ち帰り品特設売り場のかなりの面積を占めるまでになった。とりわけデコレーション用品店では、ハロウィンは、ファッシング<sup>v</sup>、復活祭、クリスマス、ジルヴェスター(大晦日)・新年<sup>vi</sup>に次ぐ売上の柱となってきたようである。もつとも、個々の事業者の<ビジネスの内訳>に注目する必要はあるだろう。

それと並んで、食品業界では、スライスしたカボチャが小売店に運び込まれた。その量が多いのは季節野菜としてではなく、家庭で怖い飾りものをつくる材料なのである。それを詰めた黒とオレンジ色の紙箱、またそこに貼られた使用説明書と意味づけ、さらに種々の見本がそれを示している。2000年には、地域のスーパーマーケットもこれを重点部門とするようになった。今日では、それはマーケットにも入り込んでいる。都会の農民マーケット、ウィーンに近い国道沿線の直売所、されにオーストリアの東部、南東部の販売センターなどである。

都会性を帯びた地方色から大規模スペクタクルへ移る連結項が、新しいタイプの収穫祭である。これは、数年前からウィーンだけでなく(ウィーンでは多くは農民マーケットと

<sup>15</sup> Oliver Haid, *Halloweening in Austria. When a Custom is Launched by a Company*. Vortrag beim 7. Internationalen Kongreß der SIEF „Times-Places-Passage. Ethnological Approaches in the New Millenium“ (Budapest, 23.-28. April 2001), vgl. Ilona Nagy (ed.), Abstracts. Budapest 2001, p.51.

接続しているが), その隣接地域や郊外でも行なわれるようになっていいる。ザルツブルク地域でも2年前から<農民の秋>と銘打つ近隣ツーリズムをここで挙げることもできよう。この体験提供の文法は、シンボル性をこめた材料として藁をふんだんに使った審美的な(モニュメントにも近づくほどの)飾り付けと、秋の色彩をふんだんに盛り込むことにおいて最も明らかになる。大量のカボチャも、そこでは欠くべからざるものとなっている。そうした催しは、ウィーン近郊のウィーンの森の草地広場で、ほぼ毎年、万聖節に行なわれている。なお、その草地広場は、従来<天上>(Am Himmel)と呼ばれていたが、数年前に<生命の樹・グループ>のために改造され、そのため<秘儀者の本部>の形容をつけられるようになった。またシュタイアマルク<sup>16</sup>の農民が主催する「ハロウィンとカボチャの祭り」にも、数千人の人々が訪れる。彼らは、いかにも田舎の集いという雰囲気なかで試食し、買い物をする。そこでは、荷車に山積みされたカボチャが、主に子供たちの手でランタンに変貌する<sup>16</sup>。かくして、シュタイアマルクの地域の仕組みのなかでは長年(内側だけではなく外に向けても)アイデンティティの担い手であったものが、カボチャとその種油を携えて都会へ進出し、シュタイアマルク全体の美しさの評価をひっくり返している<sup>17</sup>。つまり、ハロウィンとうまく折り合っているわけである。

同じような祭りとして、1999年にオーストリアの郵便局は、記念切手のシリーズとして「民間習俗と民俗文化財」を発行した。これまで何度言及した「レッツ・ラントのカボチャ祭り」もその一つに取り上げられた。その祭りは、1993年以来、毎年場所を変えて挙行され、いわばハロウィンを国民的な消費スタイルへとつなぐ連結項として模範となっているほどである<sup>18</sup>。切手がある種の指標と見ることもできようが、そこには乙女の衣装の1人の女性と2の子供が写っている。3人は畑で藁束に腰かけ、さまざまな種類のカボチャとカボチャで作られた人の顔に囲まれている。切手の発行にあたって郵便局がつけた説明によれば、レッツ・ラントは<住民が祭りをよく理解している地方>であると言う<sup>19</sup>。またカボチャ祭りのホームページの案内では、祭りを新しい伝統であり村づくりとして紹介

<sup>16</sup> パリのディズニー・ランドでも、2000年の「ハロウィン・フェスティバル」(2000年10月1-5日)では、巨大なカボチャが形を変えて中心に位置することになった。参照、Die Presse vom 29. Sept. 2000.

<sup>17</sup> Heidrun Wogrolly, *Von der "steirischen Wagenshmier" zum „EU-geschützten“ Markenprodukt. Das steirische Kürbiskernöl.* Wien, Univ.- Dipl.- Arb. 1999.

<sup>18</sup> フランスの<パンプキン/ハロウィン・メトロポール>の事例(das Beispiel von Biarritz als französischer Kurbis- und Halloween Metropole)が知られていたかどうかは不明である。参照、Der Standard vom 7./8. Oktober 2000.

<sup>19</sup> 「民間習俗と民俗文化財：カボチャ祭/ニーダーエスタライヒ州」、価格8シリング、発行日：1999年10月22日

している。それは、＜アメリカのハロウィンにちよっぴり倣っているが、地域と独自性に焦点を合わせている＞と説明されている<sup>20</sup>。祭りの中身は、祭り文化としてよく知られている要素が取り入れられている。カボチャ・プリンセス＝コンテスト（伝統的な娘の衣装の女性）、記念コインの＜カボチャ小判＞（Kürbistaler）、民俗舞踏、それに午前の軽い飲み会といったものである。料理のフォーマットは型どおりの郷土料理に沿っているが、中心には＜高級料理の試食＞があり、数年前まではその地方では知られていなかった（他のヴァージョンでは、忘れられていたが再発見された）山の幸、すなわちカボチャが君臨している。

ところで、これら全てには、プロによる地域振興策の気配が漂っている。事実、その祭りは「(有)地域マーケティング協会」によって推進され、またレッツに所在する観光専門学校も関わったのである。そして、審美性を伴う地域開発・地域観光開発の弾み車となった。因みに＜地方の地域開発＞に関するEUの推進プログラムの投資（そえばカボチャも関係する地域農業だけでなく、地域の祭り文化にも当てられる）のデータを読むと、オーストリアでのハロウィン受容路線は、EUが促進するイノベーションであることがたちまち判明する<sup>21</sup>。2000年のカボチャ祭には、当初見込みの3万人に対して、最終的には10万人が押し寄せた<sup>22</sup>。そこではまた、デコレーションだけでも、15,000箇所以上のカボチャが使われた他、輸出にも堪えることが明らかになった。EXPO2000に催された週末の＜ハロウィン行事＞に活用されたのである<sup>23</sup>。

なお、オーストリアでのハロウィン受容においてカボチャ文化の陰に隠れているものの、オーストリアの新しい行事が獲得した結合可能性として、見落とされてしまい勝ちな幾つかの要素がある。少なくともその一つは、カーニヴァルの空想と新しい料理の工夫の間にあるものとして上に挙げた展開と傾向に較べると、もっと地方的かつナショナルな特殊性にある。要するに、デーモンめいた超越的な断面を思い起こせばよい。すなわち、クラムプス習俗（行事）<sup>viii</sup>に依拠しているところがありはしないか、ということである。その際、民俗学が好んで取り上げ、屢教会の民衆劇伝統に立つアルプス地方の仮面行事を思い起こすよりは、むしろ20世紀における大都会の活動と文化産業的にかたちづくられた映像・観念世界を想起すべきであろう。すなわち、モダンな表現豊かな野性と際どい猥雑のあい

<sup>20</sup> <http://www.retzer-land.co.at/kuerbisfest2000> インターネットの行事の知識と映像の伝達者としての役割がここでも表に現れている。造形的な面では、ウェブによって送られるハロウィン・モチーフを伴うアニメーションとピクトグラムに、その役割は強く依存している。

<sup>21</sup> Der Standard vom 28./29. Oktober 2000.

<sup>22</sup> Die Presse vom 30. Oktober 2000.

<sup>23</sup> Der Standard vom 10. Oktober 2000.

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (3)

だを交替する中間領域に思いを致すなら、今初めて目にすればハロウィンにおいて斬新かつ刺激をもって立ち現れるものも、相対化されるのである。

### [訳注]

- i (p.164) ザンクト・ペルテルン (Sankt Pöltern) はウィーンの西40kmの小都市で修道院の所在地として知られてきた。; レッツ・ラント (Retz Land) はニーダーエスタライヒ州の一部で、中心の町レッツは、ウィーンの北北西50km、チェコの国境に近い。
- ii (p.164) プルカウ (Pulkau) : レッツ地方の小都市。
- iii (p.166) ニコラウス (Nikolaus) : ニコラウスは伝説では小アジアにおいて司教であったとされる。11世紀(1087年とされる)に遺骨が南イタリアのバーリ (Bari) に請来されたことから、学生・遍歴者の護り手とされたことも関係して、その崇敬はヨーロッパに広く定着した。またそれを背景にして12月6日にニコラウスを再現する民間の行事も発展し、特に子供に勉強や躰けを質す習俗が発達した。伝統的な例祭日は12月6日。近代に入ってクリスマスとの重なりが生じ、特に1930年代のアメリカにおいてコカコーラ社のイメージ・キャラクターとして今日の赤いマントのサンタクロースが派生した。
- iv (p.166) 復活祭の兎 (Osterhase) : 復活祭では子供たちに鶏卵がプレゼントされるが、それは兎は運んでくるとの説明が好んで行なわれてきた。なお鶏卵は祭り日の祝い食の食材として多くの年中行事において特筆され、復活祭に限定されない。また兎が運んでくるとの伝承は特に19世紀のロマン派の絵本で一般化した面がある。
- v (p.166) ファッシング (Fasching) : 四旬節の直前に行なわれる謝肉祭の南ドイツ・オーストリアでの名称。南西ドイツのファストナハト (or ファスナハト Fastnacht), ラテン諸国やドイツのライン地方のカーニヴァルと同じ。
- vi (p.166) ジルヴェスター (Sylvester)・新年 (Neujahr) : ジルヴェスターはこの名前の古代のローマ教皇に因み、12月31日(大晦日)を指す。
- vii (p.167) シュタイアマルク (Steiermark) : オーストリアの南東部の州名。州都はグラーツ。第一次大戦後、州南部の約三分の一は旧ユーゴの領土(現在のスロヴェニア)となった。
- viii (p.168) クラムプス習俗(行事) Krampusbrauch : 前出のニコラウスの例祭である12月6日の伝統行事の一現象。祭り行事において司教の姿のニコラウスのお供として藁の扮装などの奇怪な人物が随伴するようになったが、その名称の一つがクランプスである。正統な形姿に異様な形姿を取り合わせるのは西ヨーロッパの祭りの伝統でもある。